

ちゅう がく せい
中学生ウィーチューバーの
しん れい マ ッ プ
心霊スポットMAP③

じゅんれいか・作

ふゆき
冬木・絵



アルファポリスきずな文庫

京四郎

アカリのクラスメイトで翔陽の親友。
頭がいいけど、
オカルト好きで変わっている。

『心霊スポット
マップ
MAP』
のメンバー

アカリ

ふしぎな現象を起こしやすい
中学一年生。

懐中電灯を三つつけないと
暗い道を通れないほどの
怖がりだった。

翔陽

アカリのおさななじみで
クラスメイト。
家族のためにウィーチューバー
としてお金を稼ぎたい。

冴子

アカリの友だち。
クールで近寄りがたい雰囲気。
家はお寺。

土地神をまつっていた神社の娘。
五十年前に亡くなっている。
アカリに似ていたらしい。

瑞葉

JK霊媒師として有名な
ウィーチューバー。
死者のたましいを
呼ぶことができる。

葵

邪神

ゴングウ

ケイト

『モモ&ケイト
ちゃんねる』

モモ

邪神に仕える
キツネの
神使

シロガネ

人の恐怖心が力になる。
元は土地を守っている
土地神だった。アカリに
目をつけているようで……

登場人物

もくじ

プロローグ P 6

1 邪神のけがれをはらえ！ P 8

2 招かれざる客【恐怖指数★★★★☆】

呪われた家 P 25

霊媒師・瑞葉登場 P 50

心霊現象の理由 P 74

『呪われた家』後のミーティング P 99

3 水底の怨霊【恐怖指数★★★★★】

ダムに沈んだ村 P 108

ダムの脅威 P 123

シロガネとコンゴウ P 140

『ダムに沈んだ村』後のミーティング P 153

4 邪神との最終決戦

【恐怖指数★★★★★★★★★★★】

たましい喰いの霧 P 159

おそいくる霧 P 175

対決の行方 P 196

エピローグ P 223

プローグ

夜明け前の、真つ暗な山頂。

そこで翔陽は、邪神があやつっている管ギツネによつて、ロープを巻かれたように全身を拘束され、首を締めあげられていた。

「げほっ、ごほっ」

体がバラバラになりそうだったそのピンチは、最後の切り札を使つて抜け出したものの、邪神に致命傷を与えることはできなかった。翔陽が窮地であることは変わらない。

——往生際の悪いコゾウだ。

赤く長い髪をたなびかせながら、邪神が近づいてくる。

邪神は平安貴族のような、単の上に袍、袴という姿で、神々しく美しい容姿だ。

——気が変わった。我の手で仕留めてやろう。

「あぐっ……うう」

翔陽は邪神に顔面をつかまれ、体を持ちあげられた。体に巻きついた管ギツネは足までのびてきて、身動きが取れない。

——命乞いでもしてみるか？

「くっ……」

翔陽はギリッと歯を食いしる。

最後の切り札でも歯が立たなかった絶望感をふり払い、翔陽はこの状況から抜け出す方法がないかと頭を回転させた。

——恐怖に泣きわめけば、かわいげのあるものを。希望ついえぬ目がしやくにさわる。

邪神は手に力をこめた。翔陽の頭蓋骨がミシミシときしむ。

「ぐああああああつ——！！」

かつてない痛みに、翔陽は悲鳴をあげた。

そのとき、だれかの足音が近づいてきて——

1 邪神のけがれをはらえ！

「みなさんの力を貸してください」

『取り残された祠堂』で、邪神と対戦した翌日。

ファミリーストランで勝利を祝っていた、アカリ、翔陽、冴子、京四郎、モモ、ケイトの六人に、白衣と黒色の袴という和装の少年がそうたのんできた。

黒髪の少年の頭にはキツネのような耳、お尻にはふさふさのしつぽがはえている。彼はシロガネと名のり、邪神に仕える神使なのだという。

「おれたちに、なんの用だよ」

メンバーが緊張しているなか、慎重な顔つきで翔陽が口を開いた。さりげなく、となりに座るアカリを守るようにシロガネに体を向ける。

それも当然だ。少年が神使であれば、昨日戦った黒いキツネであり、アカリたちは彼

らに何度も危険な目にあわされた。

「そうよ、あんなことしておいて、モモたちにたのみなんて調子がよすぎるわ。だいたい、本当にあのキツネなの？」

モモはピンクゴールドのツインテールを指で払いながら、細い眉をつりあげた。さすがはアイドルで、そんな怒り顔もかわいらしい。

「本当です」

小学一年生くらいのおさない少年にしか見えないシロガネがそう言ったとたんに、どろんと和服姿がけぶつて、小型犬ほどの黒いキツネに変化した。

「わつ、キツネに変身したぞ」

「えつ、モモにも見せて」

翔陽はおどろきの声をあげ、モモは通路側にいる京四郎の前に身をのりだすようにして、キツネになったシロガネをのぞきこんだ。

アカリもとなりの翔陽の肩に手をかけて、窓側にいる冴子とケイトも、立ちあがって黒いキツネを確認する。

「本当にキツネになつて……つて、騒ぎになるんじゃない？」

人間がキツネになつたのだ。

アカリはきよろきよろと周囲を見回した。しかし、だれもアカリたちを気にしていないようだ。

「あれ？」

（気づかれてないのかな？）

ファミリールレストランは満席に近い。だれも気づかないとは思えないと、アカリは首をかしげる。

「みなさん以外に、ボクの姿は見えませんか、声も聞こえませんか？」

シロガネが人の姿に戻った。

「ボクの話聞いてくれませんか？」

シロガネは片手を胸に当てた。眉をさげ、黒目がちの大きな瞳はすんでいる。おそつてくる気配はまったくない。

「ねえ、話だけでも聞いてみようよ」

おさない少年がこまつているようにしか見えず、アカリは手をさしのべたくなつた。

「ダメよアカリ、すぐほだされるんだから。あなた、死にそうになつたでしょ。罨（わな）かもしれないわ」

冴子は冷静にアカリをとめる。

「まあまあ、冴子くん。ぼくたちをどうしようと思つていたら、話しかけずに不意打ちをしているさ。しかも彼はひとりりで来ている。本当に手を貸してほしいのだろう。ぼくたちになにを求めているのか聞いてみよう」

京四郎はメガネを指先で押しあげながら、冴子をなだめた。

「京四郎つたら、意外にやさしいのね」

「いや、ただの好奇心だろ」

モモが感心するのを、翔陽が否定した。

「多数決を取りますか？」

ケイトの提案に、冴子は首を横にふる。

「いいわ、結果は目に見えているもの」

「素直じゃないね、冴子くん。きみだつて、神使がなにを言いに来たのか、気になるんだろ？」

「京四郎といつしよにしないで」

冴子はピシヤリと突き放した。

「そうと決まったら、ふたりとも奥につめてくれ」

翔陽はアカリと冴子をうながして、空いた自分のとなりのスペースにシロガネを座らせる。シロガネがおかしなふる舞いをして、すぐにとめるつもりなのだろう。

「さて、要件を聞こうか」

京四郎はテーブルに両ひじをつき、指を組んだ。明らかにワクワクした表情で、正面にいろシロガネを見る。

（京四郎くんは、ぶれないなあ）

アカリは苦笑した。

アカリ、翔陽、冴子、京四郎の四人は、同じグループのウィーチューバーだ。

チャンネル名は『心霊スポットMAP』で、名前のとおり、怪奇現象が起こるとウワサ

されている心霊スポットに行つて検証をし、それを動画で配信している。

テーマを決めたのは京四郎で、彼が一番、怪奇現象に関心を持っている。だから、シロガネの話にきょうみを持つのは当然だった。

ちなみに、『心霊スポットMAP』が行く心霊スポットでは、かならず怪奇現象が起きた。

なぜなら、アカリがいるからだ。

霊が存在する場所ならば、アカリがいることでほぼ確実に心霊現象が起こる。そして、それはアカリ以外の者も体験することになる。

霊自体は撮影できないことが多いのだが、恐ろしい現象が起こっていることは視聴者にも伝わった。

おかげで、チャンネルを開設して三か月ほどしか経っていないのに、三十万回も再生されている動画がいくつもあるし、登録者数も一万人を超えている。飽和状態のオカルトジャンルのチャンネルとしては、まずまずの成長ではないだろうか。

モモとケイトも兄妹でウィーチューバーをしていて、歌ってはらえる、おほらい系アイ

ドルユニット『モモ&ケイトちゃんねる』を運営している。

ふたりは「アイドル」と名のるだけあって、とびきり容姿がいい。アカリたちとちがつて、彼らは登録者数が百万人超えのトップクラスのウィーチューバーだ。

「神さまを、救ってほしいんです」

ソファにちよこんと正座しているシロガネが、真剣な表情でメンバーたちにたのんだ。

「あの邪神を？」

翔陽の言葉に、シロガネは眉をさげた。「邪神」という言葉に心を痛めたようだ。

「神さまは本来、やさしいかたです。土地神として優秀で、土地を守り、すべてのものを

愛していました。けれども……」

「知っているわ。あの事件が起きたのね」

言葉につまったシロガネの後を、冴子が続けた。

（その事件のことは、『荒振神の神社』で冴子ちゃんに聞いたな）

アカリは思いだす。

五十年ほど前、神社に強盗が入り、宮司一家が殺害された。

本殿は血の海となり、ご神体も血に染まったという。

その神社でまつられていた土地神は怒り、かなしんだ。

そのことは、アカリは邪神本人からも聞いた。

——神体が血に染まったとき、我は荒振神に変化した。人の幸福を願うものから、不幸

を願うものになった。それだけだ。

すべてをあきらめているような、呪っているような、そんな表情で邪神は言っていた。

（神さまは、なりたくて荒振神になったわけじゃない）

邪神は人の恐怖を糧にして、力を増すらしい。

近年、アカリが住むこの鈴竹市は、心靈現象の目撃情報が増えて、ホラースポットが多

いエリアだと言われるようになった。それは邪神の力が高まったからだろう。

アカリたちは、その邪神と二回戦って、なんとか勝利をおさめている。

邪神はあまりに強く恐ろしい存在だが、二回にわたってアカリたちが力をけずった今なら、とどめをさせるのではないかとメンバーと話していた。

「救うって、どういうこと？ モモたちに見逃してほしいわけ？」

モモは細い眉をつりあげた。

「いいえ、神さまを元に戻してほしいんです」

「元につて、土地神に戻すつてことか？」

翔陽の言葉に、シロガネはコクリとうなずいた。

「そんなことできるの？」

「わかりません」

冴子の問いにシロガネはうつむくも、すぐに顔をあげる。

「でも、このままでは本当に荒振神になってしまいます。それは神さまだつて本意ではないはずです。だから五十年も、邪悪な心に染まりきらなかつたんです」

「その邪悪な心に染まりきつてないヤツに、おれたちは何度も殺されかけてるんだけど」
翔陽はうんざりした顔で、ベリーショート黒髪をかきあげた。

「やろうよ！ わたしも神さまに、元に戻つてほしいと思つてたんだ」

アカリはこぶしをにぎつた。

昨日、邪神はアカリだけに、メンバーが次々とたおれていく幻覚を見せた。

それはアカリにも、大切な者を失うかなしみを知つてほしかつたからだろう。

（神さまも苦しんでるんだ。きつと心のどこかで、助けを求めてるんだ）
それを察して、シロガネも動きだしたのではないか。

「だけど、その方法がわからないでしょ」

モモは細い肩をちよんとあげる。

アカリは記憶をたどるように、指先であごをなでた。

「ご神体が血でけがれたから、神さまは邪神になつたんだよね。ご神体をきれいにすればいいんじゃない？」

「アカリくん、ぼくたちが『荒振神の神社』の本殿を見たとき、そのご神体はあつた？」
京四郎に確認される。アカリは荒れ果てた本殿を思いだした。

「なかつた……、と思う」

なかつたと言うよりも、神をまつつていたと思われる道具は、どれも朽ちて原形をとどめていなかつた。

「明日、『荒振神の神社』に行つてみましょう。なにか手があるかもしれないわ」

冴子^{さえこ}の提案^{ていあん}に、アカリたちはうなずいた。

土地神^{とちがみ}が荒振神^{あらふるかみ}となり、鈴竹市^{すずたけし}に悪霊^{あくりよう}が増えた。

そのはじめりの場所^{ばしょ}が、『荒振神^{あらふるかみ}の神社^{じんじや}』だ。

「調査^{ちゆうさ}なら、モモたちが手を貸^かすまでもないわよね。お兄ちゃん、そろそろ帰りましょう」

モモがケイトに声^{こえ}をかけたのをきっかけに、メンバーは解散^{かいさん}することになった。

いつの間^まにか、窓^{まど}の外^{そと}の景色^{けしき}はオレンジ色^{いろ}に染^そまつていた。

ファミリーストランを出^でると、冷たい風^{かぜ}が吹^ふきつける。十一月^{じゅういちがつ}ともなると、さすがに寒^{さむ}くなってきた。アカリたちは制服^{せいふく}の上にコートをはおる。

「きみは帰^{かえ}らないのか？」

東京^{とうきよう}に住^すむモモとケイトとは別^{わか}れ、家路^{いえじ}につく四人^{よにん}についてくるシロガネに、京四郎^{きやうしろう}が声^{こえ}をかけた。

「コンゴウとケンカしてしまったので……」

シロガネが肩^{かた}を落^おとす。いっしょに耳^{みみ}としつぽもさがった。

「コンゴウつて、もう一匹^{いっぴき}のキツネ、いや神使^{しんし}だつて。なんでケンカなんかしたんだ？」

翔陽^{しょうよう}はシロガネと目線^{めせん}を合わせるように、正面^{しょうめん}にしゃがんだ。

「コンゴウは、神さまは荒振神^{あらふるかみ}になるべきだと考えているんです。そして、世界^{せかい}が恐怖^{きょうふ}で染^そまればいいと言^いっていました。コンゴウも宮司^{みやうし}一家^{いっか}が大好き^{だいすき}でしたから、人を憎^{にく}んでいるんです」

「メチャメチャ怖いこと言^いってんな」

翔陽^{しょうよう}が苦笑^{にがわら}いした。

「だけど、きみは土地神^{とちがみ}に戻^{もど}ってほしいと思^{おも}っている。考え^{かんが}が正反对^{せいはんたい}なんだね」

京四郎^{きやうしろう}の言葉^{ことば}に、シロガネは首^{くび}をふった。

「ボクもコンゴウと同じ気持^{きもち}ちでした。でも最近^{さいきん}、考え^{かんが}が変わ^かったんです」

「どうして？」

アカリの声^{こえ}に顔^{かお}をあげたシロガネは、四人^{よにん}を見回^{みまわ}した。

「あなたたちと会^あったからです。神さまのようすも変わりました。神さまを元^{もと}に戻^{もど}してくれるかもしれないと、希望^{きぼう}の光^{ひかり}がさしたんです」

「その方法もわからないのに。ガツカリしても知らないわよ」
冴子が釘をさす。

「いいえ、きつと……」

シロガネは、じつとアカリを見つめた。

（えっ、期待されているのは、わたし？）

アカリはドキリとする。

「やるだけやってみるか！ アカリが邪神に目をつけられてるから、どの道、邪神はどうにかしなきゃならないしな！」

翔陽は立ちあがりながら、ニカッと笑う。

（翔ちゃん、それ笑いごとじゃないから！）

アカリは心の中でツツコんだ。

「そうね。邪神を放っておくと悪霊が増えて危険だし」

冴子も同意する。

「きみ、行く当てがないなら、ぼくの家に来るかい？ 神使の生態にきょうみがある」

「ひでえさそいかただな。シロガネ、京四郎の家だけはやめておけ。なにをされるかわからないぞ」

「失敬だな、翔陽。手荒なマネはしないよ」

「京四郎は言動が物騒なんだよ」

アカリは男子ふたりの会話を聞いていて、『ひとりかくれんぼ』で使ったサルのぬいぐるみを持ち帰って観察した、と京四郎が言っていたことを思いだした。

（……不安しかない）

「うちに来る？ 京四郎くんの家みたいに広くはないけど」

アカリが声をかけると、シロガネはコクリとうなずいた。そして、小さな黒いキツネに姿を変えて、アカリの肩にふわりとのつた。

「軽い」

肩にはほとんど重さを感じない。こぶしサイズの黒い毛玉がのっているかのようだ。

「力が足りず大きくなることはできませんが、小さくなることはできます」

キツネ姿のシロガネが言った。

（便利！）

「アカリんちに行くのか。だったら、おれが引き取ろうか？」

「だいじょうぶだよ、翔ちゃん」

翔陽が心配してくれているようなので、アカリは笑顔で首をふった。

今までとはちがつて、シロガネからは敵意を感じない。

近くからじつくりとシロガネを見ると、たれた大きな目はくりつとして、しつぽはふきふきで、とてもかわいい。

（それに、わたしが一番、期待されているみたいだし）

「ねえ、シロガネくん。どうしてわたしなの？」

アカリは小声でたずねた。

たしかに一回目も二回目も、邪神に直接ダメージを与えたのはアカリだった。しかし、それは運やメンバーとの連携の賜物だ。アカリの能力だけの成果ではない。

「アカリさんが……に似ているから」

「え？ よく聞こえなかった。もう一度言つて」

シロガネはハツとしたように、大きな目をまたたかせた。

「アカリさんは神さまに立ち向かうほど、勇気があるからです」

（今度ははつきり聞こえたけど、さつきと言ったことがちがうような……）

アカリは首をひねった。

「どうかしたの？」

冴子に声をかけられて、アカリは顔をあげた。



「ううん、なんでもない」

(それにしても、荒振神になりかけている神さまを、土地神に戻すのか。大仕事だな。わ
たしたちに、できるのかなあ)

そんなことを考えながら、シロガネを肩にのせたアカリは歩きだすのだった。

2 招かれざる客【恐怖指数 ★☆☆☆☆】

呪われた家

この家にかかわる者には、たたりが起きる。
敷地に足をふみ入れた者は、衰弱して死ぬ。
家を傷つける者は、傷がはねかえって死ぬ。

翌日。学校の授業が終わり、アカリたち四人は予定どおり、『荒振神の神社』に向かう
ことにした。

アカリたちが通う中学校から、バスで二十分ほどで到着する丘の上に神社はある。
バスにゆられていると、近くに立っている女子高生たちがチラチラとこちらを見ている

のに気づいた。ほのかに頬を染めている。

（見てるのは、わたしじゃなくて、前に座ってる翔ちゃんとか京四郎くんか。イケメンだもんね）

アカリはそんなことをボンヤリと思う。

翔陽はとなりの家に住むおさなじみで、京四郎は変わった性格であることを知っているのだから、彼らは「校内イケメンのトップ」と呼ばれている。

特に京四郎は背が高く、おとなびていて、とても中学一年生には見えない。女子高生がざわつくのもムリはない。

冴子もモデルのように容姿が整っている。美人すぎて、アカリはうらやましいという感情すらわからない。

「あつ、ジャージに着がえればよかった！」

思わずバスの中で声を出してしまつて、あわててアカリは口を押さえた。アカリの肩には、小さなキツネ姿のシロガネがちよこんと座っている。

「なぜ？」

となりに座る冴子が小首をかしげる。

「ほら、前に来たとき、すぐ歩きづらかつたでしょ。草もボウボウで」

声のボリウムをおさえて、アカリは答える。

長年、放置されていた廃神社だ。その道中も荒れていた。

「それなら問題ないよ」

京四郎がふりかえつた。

「もう建て直してはじまっているからね」

バスからおりると、京四郎の言っていた意味がわかった。

以前は、丸太階段のなごりはあるものの、神社に続く道はしめつた土の斜面だった。

しかし今は、コンクリートの階段ができていて、スロープまでついている。

「わあ、歩きやすくなつて！」

アカリは階段の上でピョンとジャンプした。雑草もかられている。

「前に来たときに、ぼくはしめ縄を手配しようかと提案しただろ。きちんと約束を守ろうと、あれから動いていたんだ」

だれのイタズラか、この神社にある巨大なしめ縄が切られていた。邪神が活発化したのは、そのせいではないかとウワサされていた。

「へえ、誠実すぎて、京四郎らしくねえな」

翔陽がからかう。

「冴子くんは洗礼を受けてから、ぼくは心を入れかえたんだ」

京四郎は左の頬をさすった。冴子は眉をつりあげる。

「何度そのセリフを繰り返すつもり？」

（京四郎くんったら、まだ冴子ちゃんにビンタされたことを根に持つてるのかな）

アカリは苦笑した。

「この神社に手を入れようとなると、作業する人に悪いことが起きて進まなかったのだろ。今回はトラブルは起きていないらしい。邪神が移動したからだろうね」

そう京四郎が説明する。

（そういえば、そんな話があったな。やつと工事ができるようになったのか）

平将門の塚も撤去しようとして、それにかかわる人が何人も亡くなったと、以前に京四

郎が解説していた。神仏は聖地にふみこむ者にきびしいようだ。

長い階段をのぼりきると、真新しい石鳥居があり、太く立派なしめ縄がかかっていた。

（あ……）

鳥居の奥には、広い境内が広がっていた。地面もしつかり整えられている。

神社はグレーのシートで包まれていて見えない。その中から工事の音がする。

二か月ほど前に来たときとはまったくちがう景色だ。

空気もちがう。以前は恐ろしくも神々しい感じがした。今は、ただの広場のようだ。

「神社は取りこわして、新しく建て直している。新しい神主も見つかっているよ」

「あんなにボロボロだったんだ、さすがに修理じやすまないよな」

京四郎の言葉を、翔陽が納得したように受ける。

「シロガネくんは、ここに住んでたんだよね」

かなしんでいないかと心配して、アカリは肩にいるシロガネに目を向けた。

キツネの表情から感情を読み取ることはできないが、シロガネはじつとシートに包まれた神社を見ている。

「ボクたち神使にとつて、神社は守るべき特別なものです。でもそれは、大切な神さまがいらつしやるからこそ。ここはカラッポです」

シロガネの声は子供らしく高いけれど、ふしぎと胸にひびく。

「けれど神さまにはまた土地神として、ここに帰っていたできます。再スタートをきる神さまをお迎えするのに、新しい神社はふさわしいと思います」

シロガネは京四郎に顔を向ける。

「建て直してくださつて、ありがとうございます」

「ぼくは、少し協力しただけだよ」

京四郎は指先でメガネの位置を直した。真つすぐにお礼を言われて、照れているのかもしれない。

「ただ、邪神を戻すヒントもなくなつたつてことだよな」

翔陽はこまつたように周囲を見回した。古いものはすべて処分されたようだ。

（翔ちゃんの言うとおりだ。どうすればいいんだろう）

アカリもとほうに暮れた。

そもそも、五十年前のものが残されていれば、かならず解決したわけでもなかったが。

「シロガネ、なにかないか？ おまえが一番、邪神にくわしいんだからさ」

翔陽が水を向ける。

「葵がいたら……」

「あおい？」

翔陽がたずねる。

「宮司一家のひとり娘です。まだ七歳でしたが、巫女としての力が強く、成長が楽しみです。神さまも葵を大事にしていたので、その絆と、あの子の浄化の力があれば、神さまを戻すことができるかもしれない。……と思つたのですが」

「その葵って子、五十年前に亡くなつてゐるんだろ」

「はい。ですので、たましいの気配がないかと探つてみたのですが、いないようです」

「そんなの、シロガネがここにいたときから、わかつてたことなんじゃねえの？」

「そのころは、この地のけがれが強すぎて、たましいの気配を探ることはできませんでした。今なら、近くに葵がいればわかります。ここにいなければ、葵のたましいはこの世に

留^{とど}まっていけないのでしょね」

シロガネの声^{こゑ}がしぼんでいく。

「五十年前^{ごじゅうねんまえ}だしなあ」

翔陽^{しょうよう}はそう言^いって、なぐさめるように、ちよいちよいとシロガネの頭^{あたま}を指^{ゆび}の腹^{はら}でなでた。

「死者^{ししや}のたましいを呼^よびよせることができればいいのか」

京四郎^{きやうしろう}がシロガネに確^{かく}認^{にん}する。

「死者^{ししや}というより、葵^{あおい}のたましいですけど」

「有名なウィーチューバーの霊媒師^{しやーマン}がいるんだ」

「シャーマン？」

アカリは眉間^{みけん}にシワをよせた。

（また、はじめましての言葉^{ことば}が増^ふえた）

「簡単^{かんたん}に言^いうと、霊^{れい}的^{てき}な存在^{そんざい}と、生^いきている人間^{にんげん}との間^{あいだ}を取り持^もち、意思疎通^{いしそつう}を助^{たす}ける人^{ひと}のことだ。それを口^{くち}よせとも言^いう」

「ぜんぜん簡単^{かんたん}じゃない」

アカリの眉間^{みけん}のシワが深^{ふか}くなった。

京四郎^{きやうしろう}は「そうだな」と言^いいながら、指^{ゆび}先^{さき}でメガネの位置^{いち}を直^{なお}す。

「外国語^{がいこくご}がわからない人は通訳^{つうやく}をつけて会話^{かいわ}するだろ？ 幽霊^{ゆうれい}の存在^{そんざい}を感じ^{かん}られない人^{ひと}に

シャーマンをつけると、会話^{かいわ}できるようになる。いわば、たましいの通訳^{つうやく}だ。イタコやユタという言葉^{ことば}を聞^きいたことはないか？」

（聞^きいたことがあるような、ないような）

「説明^{せつめい}するより、見たほう^みが早^{はや}いんじゃないやねえの？ そのシャーマンの動^{どう}画^がを見^みてみようぜ。

ウィーチューバーなんだろ」

翔陽^{しょうよう}はカバンからタブレットを取りだした。

「そうだな。シャーマン、瑞葉^{みずは}、で検^{けん}索^{さく}してくれ」

京四郎^{きやうしろう}に言^いわれたように翔陽^{しょうよう}が検^{けん}索^{さく}すると、変^かわった髪^{かみ}型^{がた}の女^{じよ}性^{せい}がサムネイルになっ
ている動^{どう}画^がが、いくつもヒットした。

「高^{こう}齢^{れい}の人^{ひと}かと思^{おも}ったら、私^{わたし}たちと同じくらしい年^{ねん}齢^{れい}なのね」

「瑞葉^{みずは}くんは高^{こう}校^{こう}一^{いち}年^{ねん}生^{せい}のはずだよ」

京四郎が冴子に返事をする。

瑞葉はたれ目ぎみだが眉はキリッとあがっていて、意思の強さを感じさせる顔立ちをしていた。

振袖のついた着物をベースとしながらも、くびれたウエストをさらしている。サルエルのようなゆつたりとしたパンツの両サイドも、長いスリットが入っていて、素肌が見えていた。

一定間隔で束ねられたおさげ髪は、カラフルなビーズでかざりつけられている。首からさがっているのは、ネックレスではなく数珠のようだ。

一度見たら忘れられない、民族衣装にも見える独特な服装をしていた。

「一番、再生数の多い動画でいいか？」

翔陽が京四郎に確認する。

「その動画は、瑞葉くんが殺人事件の捜査に協力したときのようすを撮影したものだ」

「殺人事件……って、すげっ、五百万回以上、再生されてるじゃん！」

動画の再生回数を見て、翔陽がおどろいている。

（殺人か……、怖い動画なんだろうな）

アカリは緊張する。

「いぞ」

翔陽は動画を再生した。

四人は身をよせるようにタブレットの画面に注目する。

『まいど！ あの世とこの世のパイプ役、現役JK霊媒師の瑞葉やで！』

動画は、満面の笑みを浮かべた瑞葉のあいさつからはじまった。

（ええー……っ!!）

動画の内容を知っている京四郎以外の三人は、目を丸くした。

（思ってたのと、ぜんぜんちがう!）

『最近、ウチの口よせにイチヤモンつけてくるヤツらが多くてな。実際に捜査協力してるとき映像見たら、やらせちゃうってわかるやろ？ 相手は警察やし。霊媒たのむんやったら動画撮らして、って条件つけて、やっときき許可もらえた激レア動画やねん。楽しみにしててや!』

そこまでが別撮りのオープニングトークだったようで、画面がぎりかわった。

被害者へのお悔やみと、遺族には許可を得ているという注意書きが表示された後に、人通りのない川沿いの道が映った。その一角には、花やペットボトルがそなえてある。

『ここが現場やな』

『そうだ』

そう言った男性は、瑞葉に写真とタオル地のハンカチを渡す。

スーツ姿の男性はふたりいて、モザイクで顔はわからないようになっていた。このふたりは刑事なのだろう。

『被害者の写真と、最後まで身に着けてた遺品やねん』

写真とハンカチがアップになる。写真には二十代半ばの女性が写っていた。その裏には、女性のくわしい情報が書かれているようだが、そこはモザイクがかかる。

『写真の人の顔、どこかで見たような気がする』

アカリのつぶやきに、冴子が「ニュースでしょうね」と答える。

『今年の夏ごろの事件よ。すでに犯人は捕まっているわ』

「そつか、テレビで見たんだ。どんな事件か忘れちゃった」

「早朝のランニング中に、女性が体を数か所さされて殺された事件だ。『怨恨』と『通り魔』、どちらの筋も調べられていたようだが、なかなか犯人の情報は報じられなかった」

京四郎の説明を聞いて、アカリは少し思いだした。

（こつて川沿いで開けてるけど、このあたりだけは道の両側に木が生い茂っていて、見晴らしが悪い。だから、だれにも見られずに犯人は逃げられたんだな）

突然おそわれたのだろう。どんなに怖かっただろうか。

『……ウートートウ、ウートートウ……この者の思いを言葉に変えて……』

瑞葉はそう唱えながら、そなえられた花の前で両膝をついた。首に三重に巻いていた長い数珠を手にとって、ジャラジャラとこすり、体を前後にゆらす。

間もなく体のゆれがとまって、瑞葉はべたんと道に座った。

そして、苦しそうな表情でお腹を押さえる。

『ああ……痛い……助けて……!』

『落ち着いて、だいじょうぶだ。よく見て、傷はないだろ』

なれたようです、刑事が瑞葉を支える。そして口よせ中だと状況を説明した。

『名前を言えるか？』

『わたし』

瑞葉は、被害者の名前を口にしました。

「これって、瑞葉さんの体に、被害者のたましいが入った、っていうこと？」

アカリの言葉に、翔陽は「どうかな」と首をひねる。

「まだ名前を言ったただけだからな。だいたい、写真の裏に、亡くなった人の情報が書かれてたんだろ？ そうしたら、なりきって演技するのむずかしくないんじゃないやね？」

「口よせとは、そういうものだよ。たくさん霊の中から、特定の霊を呼びよせなければならぬから、情報は多いほうがいいようだ」

翔陽の疑問に、京四郎が答えた。

（住所がわからなければ、その場所に行けないのと同じかな？）

アカリはそう思った。

『わたしたちは、きみの命をうばった犯人をさがしている。協力してもらいたい』

刑事の言葉に、瑞葉はうなずいた。

『犯人の顔を見ているか？』

瑞葉はまたうなずく。刑事ふたりは緊張したように顔を見合わせた。

『それは、だれだ』

『名前はわかりません』

『名前は、と言うと……？』

『半年ほど前、よく店に来ていた男性です。この人の家には、うちのブランドの服があるはず』

「彼女は、アパレルショップの店員だったんだ」

京四郎が補足した。

『その人は、私の仕事が終わるのを待っていて、うしろからついてくるようになったんです。気持ちが悪くて、やめてほしいと伝えました。そのときに告白されましたが、断りました。それから来なくなったので、あきらめたのかと思っていたのですが……』

瑞葉は悔しそうに唇をかみしめる。

「怪しまれないように半年間おとなしくして、その間に殺人の計画を立てていた、ということかしらね」

「陰湿だなあ」

冴子の言葉に、翔陽は顔をしかめた。

『このなかに、その男はいるだろうか？ きみの死亡推定時刻に、この付近の防犯カメラに映っていた者たちだ』

刑事が写真を瑞葉に渡した。三十枚ほどありそうだ。

『この人です』

瑞葉は写真を一通り見ると、一枚を刑事にさしだした。

「もう犯人がわかったじゃない！」

「被害者に直接聞けるんだもんね。口よせてって便利！」

翔陽とアカリは興奮する。

写真を受けたった刑事は「洗い直すか」と言いつつも、瑞葉に視線を戻した。

『この写真の者たちはだれひとり、きみとの接点を見つけれなかった。彼の部屋にきみ

の店の服があれば接点と言えるが、殺人の証拠にはならない。ほかに覚えていることはなにか？』

刑事が瑞葉にたずねる。

（証拠がないと逮捕できないんだ。被害者が「犯人はこの人です」って言うてるのに）

アカリはもどかしくなる。

『あります』

『どんなことだ？』

瑞葉のきつぱりとした返事に、ふたりの刑事が食いつく。

『凶器です』

瑞葉はお腹をさする。被害者がさされた所なのだろう。

『何度も私をさした後、俺をふるからだ、ざまあしろ！』
『捨てました』
『それが見つければ、決定的な証拠になるな』

意気ようようとしている刑事の腕を、瑞葉は強くにぎる。

『……あんな自分勝手な男に殺されるなんて、悔しい。やりたいことがたくさんあったのに。私の手で呪い殺してやりたい』

瑞葉は涙をにじませた。

『それは、やめたほうがいい』

刑事は瑞葉の手を取った。

『わたしは死後の世界のこととはわからないが、この霊媒師いわく、死んだら終わり、ではないそうだ。きみのなぐさめになるかわからないが、犯人は我々がかならず捕まえる』

瑞葉の瞳から涙が流れ落ちた。

『かならず、お願いします……』

そう言うのと、瑞葉の表情がふつとなくなった。体が前後にゆれはじめ、数珠をジャラジャラとこする。

『ふわあああつ、今回、めっちゃ長かったわ、しんどい！』

瑞葉は両手を地面について四つんばいになった。肩で息をしている。被害者のたましいは、瑞葉の体から出ていったようだ。

(瑞葉さん、さっきまでと顔つきも口調もぜんぜんちがう)
アカリには演技に見えない。

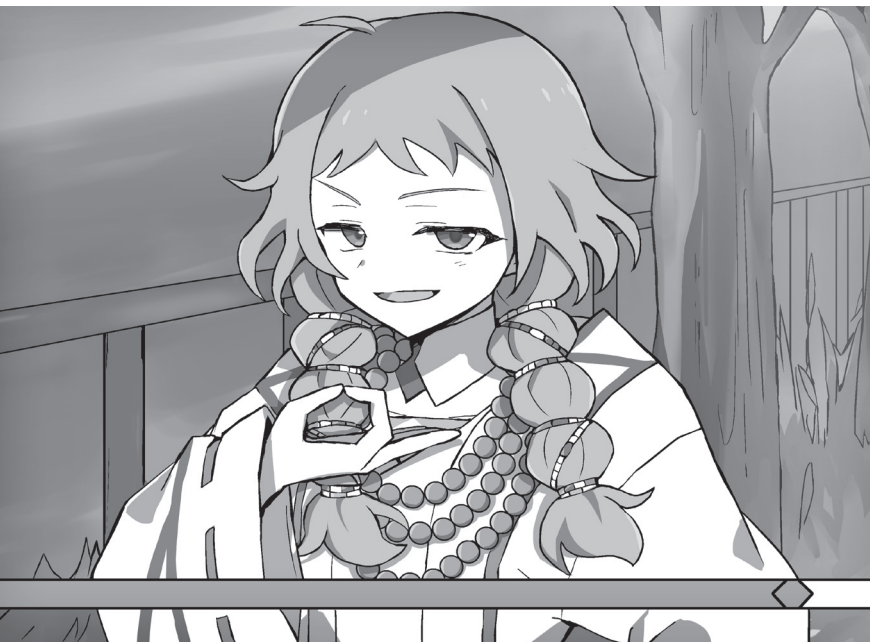
『ありがとう。きみのおかげで、捜査が進みそうだ』

刑事が瑞葉に手をさしのべて、引っぱり起こす。

『聞いてたで、よかったやん。礼は言葉より報酬でな！』

瑞葉はニヤリと笑って、指でお金マークを作る。

ここでまたカットが変わって、瑞葉のエンディングトークがあり、動画は終わった。「すげえな。マジで死者のたましいを呼び



よせられるんだな」

「瑞葉くんは本物だろうね。動画の終わりで瑞葉くんが話していたが、犯人は写真の男だったし、凶器は川から発見された」

京四郎は翔陽に同意した。

「けれど、犯人はつめが甘かったわね。半年も準備期間があつたのに、肝心の凶器を近くの川に捨てるなんて」

「どうかな。ぼくが犯人でも、凶器の処分場所として川は候補にあがつたよ。あの川は幅が広くて流れも速い。確実に証拠があるとわかっていなければ、川底なんて徹底的には調べない場所だ。実際に、川にしぼった捜索でも凶器の発見には数日かかっているし、かなり下流に流されていた。見つかるまでにこれ以上時間がかかれば、指紋や血痕は採取できなくなるよ」

冴子の疑問に、京四郎が意見を述べた。

（説得力はあるけど、自分を犯人に置き換えて考えるとところが、京四郎くんって感じ）
アカリは苦笑した。

「よし、シャーマンの能力はよくわかったよ。それで瑞葉に、葵のたましいを呼んでほし
いってたのめばいいわけだな」

はちんと翔陽は手を打った。

「協力してくれるかな。捜査協力までしている人なら忙しそうだし、高くつきそう」

アカリは不安げに眉を上げた。

「ぼくが交渉してみるよ。前からコンタクトを取りたかつたんだ」

「今度は、相手を怒らせて呼びよせるようなことはしないでね、京四郎」

冴子が釘をさした。モモとケイトとの出会いを思い出したのだろう。

「ぼくは成功確率の高い方法を選んでいただけなのに。そんな言い方をされると、傷つくな」

「言葉と表情が合っていないわよ」

「じゃあ、京四郎くん、よろしくね！」

アカリが京四郎と冴子の間に割って入った。

（前よりへったけど、すぐふたりは口ゲンカみたいになるんだから）

アカリはやれやれと肩をすくめた。

「本当に、葵を呼べるのでしょうか……？」

アカリの肩にのっているシロガネがつぶやく。あきらめの中に、ほんの少しの希望を混ぜたような、そんな声だった。

「会えるといいね」

アカリはシロガネの背中を軽くなでた。

一週間後の放課後。

京四郎は「瑞葉くんと連絡が取れた」と言つて、『心霊スポットMAP』のメンバーを集めた。

とはいえ、アカリ、翔陽、京四郎はクラスメイトなので、冴子がとなりの教室から来るだけなのだが。

シロガネはアカリの部屋で留守番だ。

「それで、葵を呼んでくれることになったのか？」

「いや、その前段階なんだよ」

さつそくきりこんできた翔陽に、京四郎は首をふった。

SNSにメッセージを送っていたんだけど、はじめは返事すらなかった。何度も連絡しているうちに、話を聞く条件として、ある空き家の悪霊をはらってほしい、と言われたんだ」

「まだ、たのみたい内容を伝えられていない状態なのね」

そう言いながら、冴子は頬にかかったショートボブの黒髪を耳にかけた。

「なんで、そんな条件を出してきたんだろうね。シャーマンって、おほらいをするの？」

アカリは首をかしげた。

「いや、本人も言っていただろ、あの世とこの世のパイプ役って。自分でできないから、ぼくたちにたのんできたのだろう。理由はわからないけれど、その家の悪霊をはらえなければ、話を聞いてもらえない」

「だったら、やるしかねえな。おれたちならできるんじゃないやねえの？ ガチでおほらい専門のモモたちにも、おほらいバトルで勝ったわけだし」

翔陽は頭のうしろで両手を組んで、ニカッと笑う。

「わたしたち、なぜか毎回のように幽霊退治をしてるよね。心霊スポットに行つて、怪異が起こるか確認するチャンネルのはずなのに」

アカリは頭を抱えた。

そもそもアカリは、怖いことが苦手なのだ。このチャンネルをきっかけに、暗闇恐怖症は治ったが、何度怪異を体験しても怖いことにはなれない。

「悪霊が出る家つて、どんなところなんだ？」

翔陽がたずねる。

「くわしい説明は、瑞葉くんがするだろう。みんな、今夜空いているか？」

「今日かよ、急だな！」

「せっかく悪霊が出るという家に行くんだ。動画にするしかないだろう。瑞葉くんから連絡先を聞いて、家主に撮影の許可を取つてある」

（京四郎くん、あいかわらず仕事が早い！）

チャンネル名にあるように、京四郎は全国の心霊スポットが描かれた地図を持っている。

行つた場所には、ひとだまの形をした赤いシールがはられる。またひとつ、地図のシールが増えることになりそうだ。

「それにしても京四郎、新しい心霊スポットに行くのに、あまりテンションがあがつていないわね。いつも気持ち悪いくらいニヤニヤしてるのに」

「冴子くん、ぼくにだけ当たりがキツくないか？」

「気にしてないくせに」

「そんなことないよ。傷つく」

京四郎はシクシクと泣いたふりをする。

（ウソ泣きだ。気にしてなさそう）

なんだかんだと、ふたりはこのやり取りを楽しんでいるような気がしてきた。

「冴子くんの言うとおり、ときめく心霊スポットじゃないんだ。調べただけど、あまり情報がないというか、気になることもあるし……」

（京四郎くん、いつも心霊スポットにときめいてたんだ）

アカリは心の中でツツコんだ。

「京四郎、気になることってなんだ？」
翔陽がたずねる。

「……その家は本当に、心霊スポットなのかな」

「どういう意味だ？」

「いや、気にしても仕方がないね。どんな家であろうと、ぼくたちは行くしかないんだから」

悪霊が出る『呪われた家』は、都内にあるという。アカリが住むこの鈴竹市から、一時間以上かかりそうだ。

霊媒師・瑞葉登場

四人は家に帰って私服に着がえ、準備を整えた。それから駅に集合して『呪われた家』に向かった。

アカリは電車の中で、スマートフォンで『呪われた家』のウワサを調べた。

「この家にかかわる者には、たたりが起きる。敷地に足をふみ入れた者は、衰弱して死ぬ。家を傷つける者は、傷がはねかえって死ぬ」……って、SNSに書いてある」

「こつちのブログは、その家の近所の人が書いたのかな。今日も『呪われた家』に業者が来ていたけど、みんなケガをしたり、体調をくずしたりして、なにもできないまま帰っていった。あぶないから、『呪われた家』には近づかなければいいのに」って書かれてる」

翔陽はとなりに座るアカリに、自分のスマートフォンの画面を見せた。

「いくつかウワサが書かれてるけど、どれも個人のSNSやブログで、あまり話題になっていないみたい」

翔陽とは反対側のとなりに座る冴子が、スマートフォンの画面をスクロールしながら言った。

「日付も見えてほしい。今年のものしかないから」

京四郎の言葉でアカリが日付を見ると、すべて今年投稿されていた。

（つてことは、まだ新しい心霊スポットなのかな？）